

2024年3月の総評に代えて 高橋修宏

戦争の話をする

桜望子（山形県）

君は美しい口の形で

けっして難解なわけではない。にもかかわらず、ザラリとした異和感を残すのは、二行目の「美しい」という形容詞にあるだろう。もしや、われわれも遠くの「戦争の話」を、「美しい口の形」で話しているのかもしれない。

自転車が過ぎる街そのものが墓

まちりこ（埼玉県）

結句に置かれた「墓」の文字に驚かされた。死後からの眼差しだろうか。あるいは、ふだん何げなく「自転車」で過ぎる街も、何千年、いや何万年後には「墓」となっている、のかもしれないのだ。

すきだった人

さいう（石川県）

に

わたしは退化して

きみは背びれものこさずに去る

この作中の主体は、どのようなものだろう。「すきだった人」、「わたし」、そして「きみ」と呼ばれる各々が、作中で融けあい、入れ替わる迷宮のような感触が魅力的だ。おそらくキーとなる言葉は、「退化」と「背びれ」か。それは、人間以前（あるいは以後）の主体のようでもある。

前職のクセで背びれが動いちゃう

松下誠一（東京都）

この作品でも「背びれ」がキーワード。その「前職」とは、いったいどのような職業であったのか、さまざまに想像させられる。（ついに、わからないけれども…）

好きなもの  
愛してみたりすることで、  
人の形を保っているよ。

たんころぶ（兵庫県）

人によって「好きなもの」は、実にさまざまだ。他人から見たら理解しがたいものであっても、その人にとって愛着のある掛替のないもの——。おそらく、それが〈その人〉であるための、ささやかな根拠であるのかもしれない。

羽化ばかりしていて蛹のその先へ  
行けないままで眠る黄昏

マズルカ（山口県）

「羽化」しても成熟できない主体——それは、どこか〈モラトリアム〉ということを感じさせるが、「蛹」という言葉によって詩的なリアリティを得た。また「眠る黄昏」が、自閉的でありながらも平穏な気配さえ感じさせる。

流刑地に百千の「る」の閉じた口

大嶋碧月（兵庫県）

「流刑地」の頭音が「る」を呼び出しながら、「閉じた口」と身体性を強調することで、映像的なイメージも生まれた。「百千」の口が立ち現われるようだ。

四首目と五首目にはさまる静寂へ  
猫型ロボット来ていちごパフェを

汐見りら（東京都）

おそらく飲食店で、歌集を読んでいるのだろう。その行間の「静寂」に、「猫型ロボット」がパフェを運んでくるとは、まさにAI化する世界の光景が、ユーモラスに（また、お茶目に）切り取られている。

首を少し絞めれば石鯰の香り

西尾日月（島根県）

どこか倒錯的（マゾヒスティック）な性愛が、ほのめかされるが「石鯰の香り」によってリアルな実感をもたらされた。俳人の島津亮にも〈怒らぬから青野で絞める友の首〉という怪作がある。

日付変更線跨ぎ島の子が  
明日の魚を持って戻った

貴田雄介（熊本県）

何より「日付変更線」と「明日の魚」の取り合わせが面白い。なるほど、「日付変更線」を跨げば、同じ魚であっても「明日の魚」になってしまうのかもしれない。

坂道を駆け降りてゆく毛先から  
歌声までを春風と呼ぶ

花野木春（東京都）

自らの身体に引きつけて、「春風」を捉えた視点がユニーク。微細な「毛先」から、かたちにならない「歌声」という把握が、どこか不確かな「春風」をめぐる時間のイメージと響きあうようだ。

淡雪にかたつむり管ぴやぴやと

蝸牛（奈良県）

季語では「淡雪」は早春、「かたつむり」は夏となるが、この作品では通用しない。何よりも、「ぴやぴや」という不思議な擬音（オノマトペ）が印象的。降ると直ちに融けてゆく「淡雪」のイメージと共鳴し、「かたつむり管」が変容してゆく。